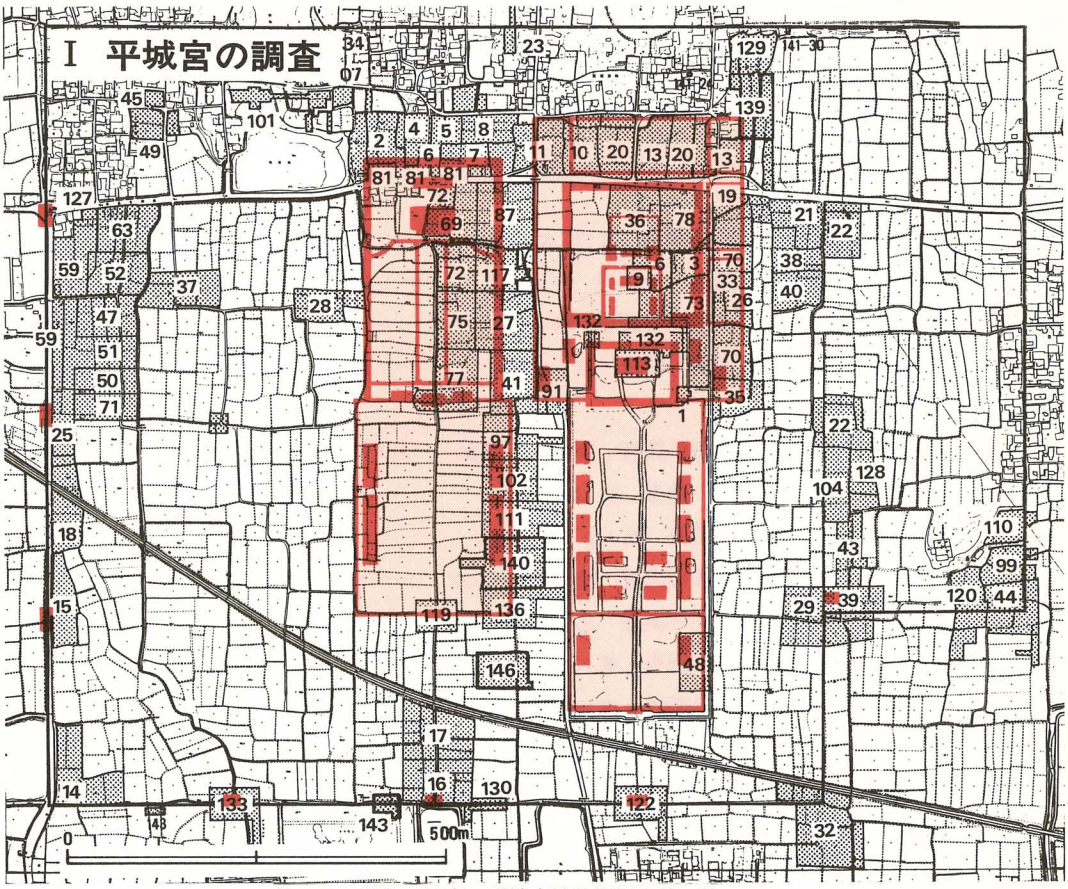


第１図　昭和57年度　平城宮跡発掘調査地一覧

平城宮内調査地一覧

次　数	調　査　地　区	面積㎡	期　間	備　考	担当者
第139次	内裏北外郭東北部 ６ＡＡＡ・Ｂ	3800	'82 3.29～7.12		佐藤　信
第140次	推定第一次朝堂院地区 ６ＡＢＨ・Ｉ・Ｕ・Ｖ	5600	'82 8.19～ '83 1.13		巽淳一郎 岩永省三
第143次	南面大垣　朱雀門西 ６ＡＢＹ	810	'82 7.7～8.20		今泉隆雄
143補	〃　若犬養門西 ６ＡＣＵ	75	'83 2.14～2.21		松井　章
第146次	第一次朝集殿推定地 ６ＡＢＪ・Ｋ・Ｗ・Ｘ	3100	'82 12.7～ '83 5.2		杉山　洋
第141 24次	第二次内裏北方官衙地区 ６ＡＡＮ	7	'82 11.4～11.8	今川徳治	清田善樹
第141 30	北面大垣　６ＡＡＡ 佐紀町字水上1193－８	11.3	'82 12.14～ 12.16	佐紀町水利組合	金子裕之
第141 11	宮北辺　６ＡＧＵ 佐紀町3535	13.5	'82 7.1	西口弘一	千田剛道
第141 34	〃　６ＡＧＵ 佐紀町3046	5	'83 3.8	城田依則	森　郁夫
第141 38	〃　６ＡＧＵ 山陵町古所33	10.2	'83 3.29	山本義晴	森　郁夫

1　内裏北外郭東北部の調査 第139次

調査区は平城宮内裏の東北部、内裏北外郭の東北隅をふくむ地区で、南は1963年の第13次調査区、北は1981年の第129次調査区に接する。第13次調査では内裏北外郭東部の官衙建物群とその東を限る築地を検出し（『平城宮発掘調査報告』Ⅶ）、また第129次調査では宮北面大垣のすぐ南側に整然と配置された官衙建物群と内裏東方を南流する幹線排水路SD 2700（東大溝）の北端部などを検出した（『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）。なおSD 2700は古く1928・32年の奈良県技師岸熊吉氏による調査（『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』12・13）や、南方の第21次調査（1964～65年）（『奈良国立文化財研究所年報』1965）でも確認している。今回の調査では、内裏北外郭東北隅およびSD2700を確認するとともに内裏北外郭東北部の性格を明らかにすることを目的とした。

なお、発掘面積は3,800㎡、調査期間は1982年3月29日から7月12日までである。

遺　　構

調査地は内裏の占地する南へのびる丘陵の東斜面に位置し、宮造営にともない大規模な整地を行なっている。土層は旧耕土・床土（20～40㎝）の下に灰褐色砂質土、黄灰褐色粘質土などがあり、現地表下40～120㎝で黄褐色粘質土の地山となる。傾斜する地形に応じ、西方の地山を削って東方に盛土整地しており、主な遺構はこの整地土（黄灰褐色粘質土）および地山面で検出した。なお調査区西方には前方後円墳市庭古墳があり、整地土中には円筒埴輪片がふくまれていた。

今回検出した主な遺構は掘立柱建物8棟、築地2条、掘立柱塀3条、溝13条、土壙10基などである。遺構の重複関係はあまりみられなかったので、以下内裏北外郭部、北外郭北部、南北大溝SD 2700、SD 2700以東に地区を分けて各地区ごとの遺構の状況をみる。

内裏北外郭地区　南北築地SA 705と東西築地SA 10500の交わる内裏外郭東北隅を検出した。SA 705は築地基底部の版築（最高20㎝）および西側の築地寄柱柱穴列を検出した。寄柱の柱間は10尺等間であるが、東側の寄柱柱穴列は削平の

ため検出できなかった。SA 10500は基礎地業の版築をわずかに残すのみで、寄柱のものと思われる柱穴が南北1個ずつみられた。これらの築地による区画の内側には宮造営後の整地層と思われる炭混り茶褐色土の層があり、軒瓦（6311 ― 6664D・F、6313― 6685、6225― 6663型式の組合せが多い）をふくむ多数の瓦や凝灰岩切石片が出土した。

宮造営前の遺構として、内裏外郭内からその北方にかけて8基の焼土壙SK10504～10511を検出した。これらの土壙は平面が長さ1.2m、幅0.8mほどの隅丸長方形で、深さは15cm前後残る。粘土を貼った壁面は焼け、壁面に沿って炭・灰がつまっていた。土壙周辺部には土壙内よりかき出した炭・灰の薄層がみられ、その上を宮造営時の整地土が覆っていた。出土遺物は無く、用途・性格は不明である。なお同様の焼土壙を第13次・第129次調査でも検出している。

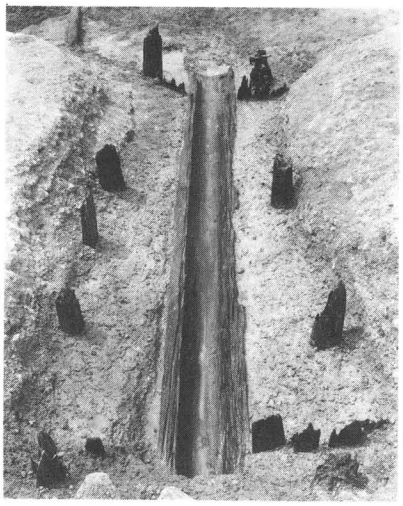
内裏北外郭北方　調査区北端部では、第129次調査で検出した官衙建物群の南を限る施設が明らかになった。東西溝SD 9797と、その北の掘立柱の棟門SB 9810A・Bであり、門SB 9810A・Bの棟通りの東延長上には後述のようにSD 2700に木樋暗渠施設SX 10560があることから、SB 9810A・Bをはさんで東西に走る築地が存在した可能性がある。築地をこの位置に想定すると、南の内裏外郭の北面築地心との距離は54m（180尺）を測ることになる。

この北端の遺構と南の内裏北外郭との間の遺構としては、まず宮造営前の遺構としてSK 10582・SX 10575・SX 10588・SD 10578がある。土壙SK 10582は平面が長さ1.5m、幅0.8mの隅丸長方形で、深さは25cmまで残る。底に7世紀後半の土師器杯を埋置しており、土壙墓と考えられる。SX 10575・SX 10588は宮造営に際して埋めたてられた旧地形の地山の凹み、SD 10578は東南に流れる斜行溝である。平城宮時代の遺構としては、SB 10565・SX 10580・SB 10590がある。SB 10565は桁行5間以上・梁間2間以上の南北棟の掘立柱建物で、柱間は桁行が7尺（北端のみ6尺）、梁間が6尺を測る。SX 10580は1本柱の掘立柱掘形で径40cmの柱根が遺存するが、性格は不詳である。SB 10590は桁行2間・梁間1間の小規模な東西棟掘立柱建物で、柱間は桁行6尺・梁間8尺。柱の

規模から、第129次調査で平安時代初め頃に比定した小規模建物群と一連のものと推定される。北端の東西溝SD 9797と内裏外郭北面築地 SA 10500の間には上記の遺構のほかには顕著な遺構はなく、広場的な空間 SH 10570であったと思われる。

南北大溝SD 2700　SD 2700は上幅2.0 m・底幅0.9 m・深さ 1.4 mの規模で、人頭大の玉石（三笠安山岩）を6～7段積んで護岸とした石組溝である。溝の築成順序としては、まず断面V字形の素掘りの溝（掘形）を掘り、最下層に礫混り灰色砂の堆積（約30cm）を経たのち、粘質土を裏ごめとしながら人頭大の玉石を積み上げ石組溝として完成している。SD 2700の堆積層は石組の底面から上がさらに5層に分けられ、その最下層から養老7～天平4（723～732）年、下から2層めに神亀3～天平9（726～737）年、4層めに天平宝字4～6（760～762）年の紀年木簡が出土しており、最上層からは「天応」（781～2年）の銘をもつ墨書土器が出土した。SD 2700が奈良時代を通じて順次埋まっていったことが知られるのである。このSD 2700の中に、北から SX 10560・SX 10556・SX10555・SX 10535の諸施設を検出した。SX 10560は全長5.6 m・外径0.5m・内径0.3 mの断面U字形の一木の木樋である。側部の上面には雇い柄の柄穴が南北3箇所あるので、上に蓋がかぶる暗渠であったことがわかる。木樋の東西のSD 2700岸

第2図　東大溝SD 2700　南から

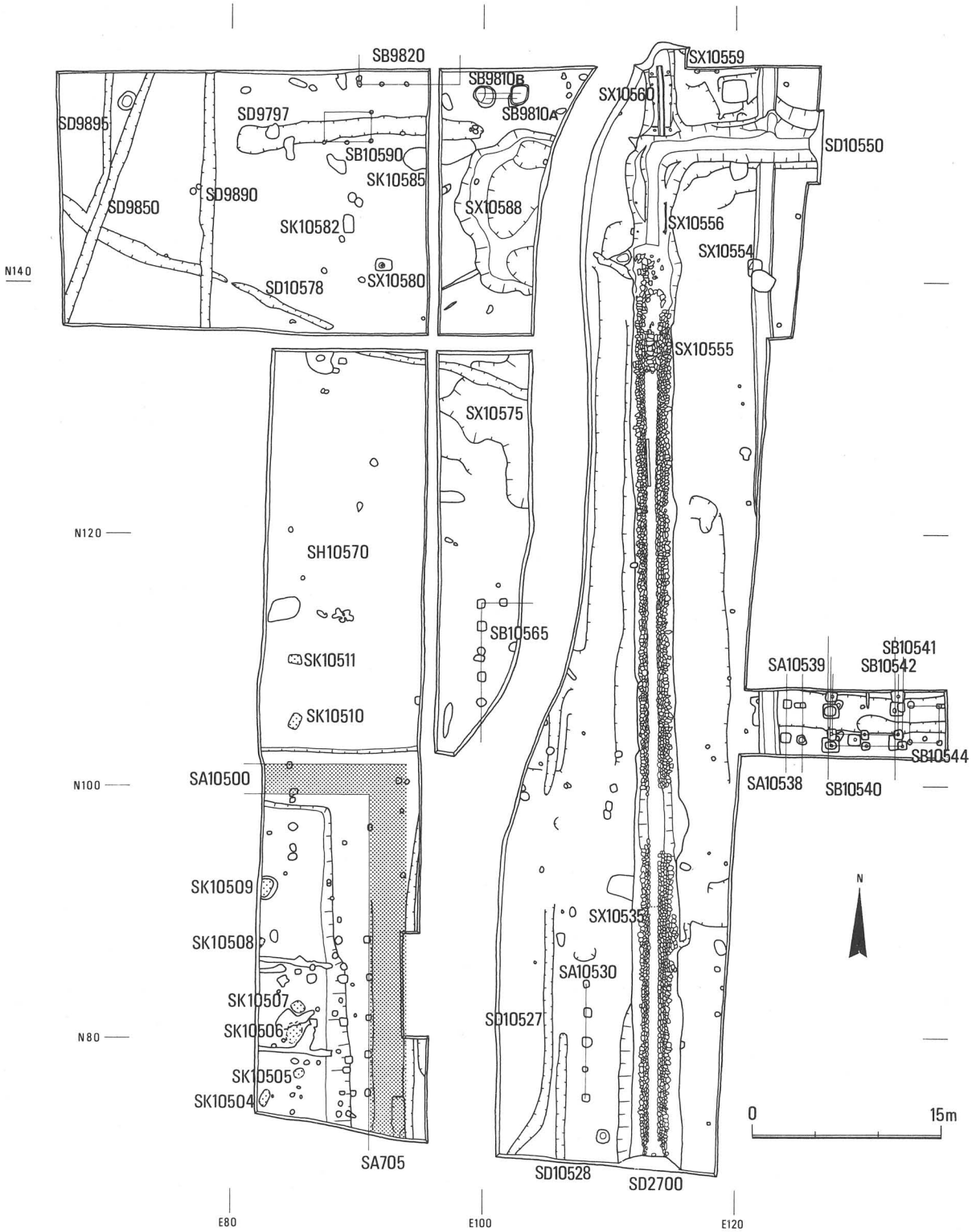


第3図　大樋SX 10560　北から

際には相対する4本の柱根が残っており、木樋暗渠の上にSD 2700を横断する何らかの構造物が設けられたことを推測できる。この木樋はSD 2700に土層が3層堆積したのちに築かれたものである。SX 10556は木杭を打ち込んで横板（残存最大長2.7 m・幅0.2m・厚さ0.15 m ）をとめた護岸施設で、SD 2700をわたる橋があった可能性もある。ただしこの遺構はSD 2700がほとんど埋まった時期のものである。SX 10555はSD 2700の溝底を一段低く下げて玉石を敷きつめた石敷施設。この部分のみ護岸石組の積み上げ方も技法が他と異なり、また底を下げていることから、すべての石組に先だってこの石敷施設が築かれたことになる。このSX 10555のすぐ北側でSD 2700の護岸石組は終わり、それ以北は北方の第129次調査区をふくめてSD 2700は素掘りのままである。SX 10535はSD2700が3層ほど埋まった時点で設けられた堰である。先端を尖らせた径5㎝の杭を7本東西に打ち込んでいた。この堰にせきとめられたように遺物が出土している。なお、今回発掘したSD 2700の範囲に、1928・32年の岸熊吉氏によるトレンチが3箇所みられた。調査区南部で護岸の玉石が抜き取られている部分はその一つである。

ＳＤ 2700 以東　調査区北端でSD 2700の東に接続する東西溝 SD 10550を検出した。SD 10550は上幅2.7 m・底幅1.0・深さ1.7mの素掘りの溝である。堆積はSD 2700とほぼ同じであり、下層の2層から天平元(729) 年・天平6 (734)年の紀年木簡、最上層から「天応元年」（781年）の墨書土器が出土した。SD 10550の位置は北の官衙ブロックの南を限る東西溝SD 9797と軸をあわせており、またＳＤ 2700 に並ぶ規模でもあって、この地区の区画割りを決める基本的な東西溝といえよう。

東に一部拡張した調査区においては、掘立柱建物4棟・掘立柱塀2条を検出した。SB 10540は一辺1 m強の方形柱掘形をもつ南北棟掘立柱建物で、柱間9尺で桁行3間以上。妻の部分は検出できなかったが、柱間9尺とすると梁間2間となる。このSB 10540の柱掘形を切って掘立柱建物 SB 10541・SB 10542が建てられている。SB 10541は桁行2間以上（柱間9尺）・梁間2間（柱間9.5尺）



第４図　内裏北外郭東北部発掘遺構図

の南北棟で、南妻を検出した。また SB 10542 も南北棟建物で、桁行 2 間以上（柱間10尺）・梁間 2 間（柱間 9 尺）であり、南妻を検出した。SB 10541・SB 10542の新旧関係は今回の調査区内では判明しない。SA 10538 は上記の南北棟建物の西を画する掘立柱南北塀で、柱間は 7 尺を測る。小規模な掘立柱建物 SB 10544と掘立柱南北塀 SA 10539 は奈良時代以降のものと考えられる。調査区北部の SX 10554 は単独の掘立柱掘形で、西方の SX 10580 と似ているが、同じく性格不詳である。

遺　　物

SD 2700・SD 10550を中心として木簡・瓦・土器・木製品・金属製品が多数出土した。また内裏北外郭地区からは大量の瓦・土器が出土した。

木簡　計 258 点で、SD 2700から 194 点、SD 10550から63点、SD 10545 から 1 点出土している。SD 2700に SD 10550 がとりつく付近から特に多量の木簡が出土した。両溝からは養老 7（723）年から天平宝字 6（762）年までの紀年木簡が23点出土した。木簡の特徴としては、(1)紀年木簡が堆積の順にみられること、(2)隠伎国の荷札木簡が集中する（15点）こと、(3)新しく税目（正丁作物）や木簡製作法が知られる例があること、(4)削屑が少ないことなどがあげられる。以下主な釈文をかかげておく（1～4 は SD 2700、5 は SD 10550出土）。

1. ・　　歳後天恩母倉□□□□〔入カ〕
　・「□□□□　次□□□□□」　　333 ×18×10　011 型式

2 ・駿河國志太郡正丁作物布乃里一籠
　・　　天平勝寶六年十月　　（148）×14× 3　019 型式

3　隠伎國海部郡佐吉郷日下マ止々□
　　調鯰六斤養老七年　　156 ×32× 7　031 型式

4 ・　参河國播豆郡大御米五斗
　・「□□□　□マ□〔小カ〕鳴□□」（側面、天地逆）　　135 ×15× 4　031 型式

5　獺肝二具　　65 ×21× 5　032 型式

瓦　出土した軒瓦は軒丸瓦 252 点、軒平瓦 214 点の計 466 点におよぶ。そのうち 255 点が内裏北外郭地区から出土しており、平城宮軒瓦編年第Ⅱ期（養老 5 年

～天平17年）の6311 － 6664 D・F型式、6313 － 6685 型式、第Ⅲ期（天平17年～天平勝宝年間）の6225 － 6663型式のセットが多くを占める。SD 2700からは179点の軒瓦が出土した。また珍しい鳳凰紋のものをふくめ鬼瓦が3点出土している。なお内裏北外郭地区からは凝灰岩切片も多数出土した。

土器　SD 2700・SD 10550を中心に土師器・須恵器が大量に出土した。また円面硯・転用硯・土馬なども出土している。土器の中には約130点余の墨書土器がふくまれ、墨書銘としては「大膳」「内薬□」「官」「人給所」「□□厨〔女孺カ〕」など官司関係のもの、「天応元年」「天応」といった年紀、「烏膏」「酒」「菓」などの物品名のほか、「供養」「上番」「真勝」などが認められる。なお内裏北外郭地区からは「中宮安　中宮」という墨書土器が出土した。

木製品　人形・削り掛け・刀形などの祭祀具、曲物・折敷・飾鋲付漆塗木櫃片などの容器類のほか、木彫面（表紙参照）や「㊍」の陰刻文をもつ木印、糸巻き・工具柄・杓子・横櫛・木針・桧扇などが主としてSD 2700から出土した。

金属製品　和同開珎16点・万年通宝4点・神功開宝13点、寛永通宝4点などの銭貨のほか、金銅製垂飾・金銅製飾鋲・帯金具（丸鞆3点・巡方3点）・鉄釘28点などがSD 2700を中心に出土している。

まとめ

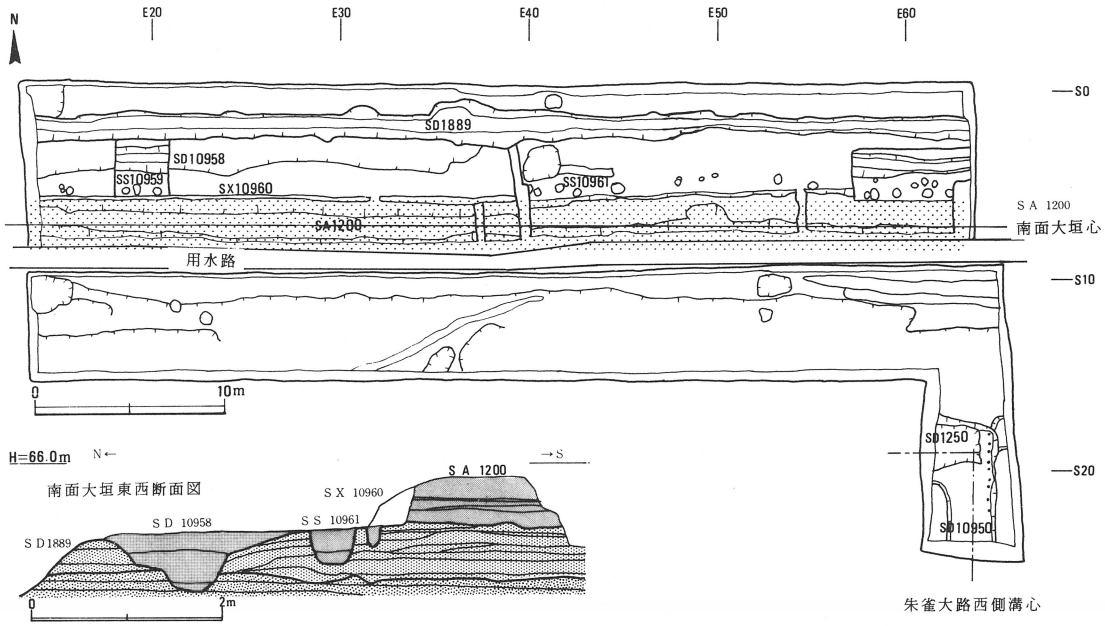
今回の調査により、内裏北外郭東北部の様相をかなり明確にすることができた。まず、築地に囲まれた内裏北外郭の東北隅を確認した。内裏外郭の北面築地の検出ははじめてであり、これにより内裏外郭の規模が明らかとなった。すなわち、内裏外郭の南北距離はほぼ1260　尺となることが判明したが、これは築地回廊に囲まれた内裏内郭の南北距離630尺の2倍にあたる。次に、平城宮東部の幹線排水路である南北大溝SD 2700を90mにわたって検出し、その規模と構造を明らかにするとともに豊富な遺物を得ることができた。また、新たにSD 2700につながる東西溝 SD 10550を検出し、この地区の区画割りに関して新知見を得た。そして、内裏北外郭の北、第129次調査で知られた官衙建物群との間が、南北180尺にわたる広場的空間 SH 10570であったことが明らかになった。

2　南面大垣―朱雀門西―の調査　第143次

調査地は朱雀門跡の西方の南面大垣である。これまで南面大垣については、第14・16・32・122・130・133次の6次の発掘調査を行ない、掘込地業を行った基底幅9尺の築地塀であることが明らかになっている。今回の調査地は、第16次調査区と一部重複してその西に当り、また朱雀門を中心として第130次調査区と東西対称の位置にある。この調査は、同地の南面大垣復原整備に先だつもので、大垣に関する詳しい資料を得ること、遺構の残存状況を確認し、さらに朱雀門近辺の条坊遺構を確かめることを目的とした。

調査区は、東西用水路を間にして北区・南区の二区を設けた。北区は南北9ｍ東西50ｍで、大垣の検出のために設けた。南区は大垣の壇地の状況の把握のために、南北6ｍ、東西52ｍのトレンチを設け、さらに二条大路北側溝と朱雀大路西側溝との交点の確認のために、トレンチ東端で南へ鍵の手にのびる東西5ｍ、南北9ｍの拡張区を設定した。発掘総面積は約810㎡である。なお両区とも新しい客土によって埋めたてられているが、旧表土面では、北区が南区より50㎝高い。

北区　旧表土下約40㎝が奈良時代の遺構面である。南面大垣、大垣構築に伴なう堰板を据えるための溝・添柱列、東西溝2条などを検出した。南面大垣SA 1200は調査区南辺に東西50ｍ分を検出した。調査区南辺に接して走る用水路によってその南辺が破壊され、幅1.5～2.0ｍ、高さ50㎝の基底部が遺存する。他の調査区の南面大垣とは異なって、掘込地業は確認できなかった。地山の上に、3～5層（厚さ30～50㎝）の整地を行ない、その上に築地を築く。築地は厚い層（15～20㎝）と薄い層（2～4㎝）との互層の版築である。大垣基底部の北裾を東西に走る溝状遺構SX 10960、それに北接する東西柱列SS 10959・10961、さらにその北側に東西溝SD 10958を検出した。これらはいずれも整地層から掘りこまれ、築地の構築に伴なうものと考える。SX 10960は幅15～40㎝、深さ20㎝の溝状の遺構であるが、水流の痕跡はなくすぐに埋めもどされている。西半26ｍの範囲で検出し、東半では、後述する拡幅の築土におおわれているので断ち割り調査



第５図　南面大垣地区発掘遺構図

で確認した。SS 10959はSX 10960に北接する東西柱列で、調査区西端で4個東端で4個の計8個を検出した。柱穴は直径40cmほどの円形の掘形で、柱間間隔は不揃いで、50～150cm。SS 10959は、第130次調査でも検出した築地構築時の堰板を押える添柱列で、SX 10960は堰板を据えるための溝（堰板溝と仮称する）と考える。堰板溝の検出は今回が初めてである。築地南辺は全体にわたって破壊されているが、SX 10960が築地基底部の北辺に当るから、これまでの調査による基底幅9尺として、大垣築地の位置を復原できる。

東半24mの範囲では、基底部北裾に最大幅60cmの暗黄色粘土の堅固な築土を検出した。これはSX 10960・SS 10959をおおっているので、後に築地を拡幅した築土と考える。この築土の北に接して東西柱列SS 10961を検出したが、これは拡幅の際の堰板の添柱柱列であろう。SD 10958は、SX 10960から北1.8 m（溝心々距離）に位置する東西溝で、調査区東端で6m、西端で3mの範囲で検出した。深さ50～60cmで、幅は一定せず0.8～1.4mである。水流の痕跡はみられず、築地築土と同類の土で埋めたてられており、築地の雨落溝とは考えにくい。その機能ははっきりしないが、同溝を境にして南・北で整地層に相違のみられることから、築地構築に伴なう溝状の掘りこみではないかと推定する。なお第130次調査でも、掘りこみ面が地山面であるという相違はあるが、ほぼ同位置に東西溝SD 9487を検出した。築地の寄柱は、従来の調査と同じく検出できなかった。

SD 1889はSX 10960の北3.2 mに位置する東西溝で、幅1.2～1.4m、深さ40cmである。すでに、第16次調査でも検出し、SA 1200の北雨落溝であるとともに北にある宮内道路SF 1880の南側溝に当る溝である。

南区　旧表土下約80cmが奈良時代の遺構面である。調査区東端の拡張区に、T字状に接続する東西溝SD 1250と南北溝SD 10950を検出した。SD 1250は南面大垣中心から12mに位置する素掘りの溝で、二条大路北側溝で、かつ宮の南面外濠に当る。幅3.4 m、深さは60cmでSD 10950よりも20cmほど深い。ただし、SD 10950より東へ伸びて朱雀大路を横断する部分は、幅が1.6 mで狭く、深さも30cmと浅くなっている。この状況は東側の第130次調査でもほぼ同じである。SD

10950は朱雀大路西側溝に当る。当初幅 2.5 m、深さ40cmの素掘り溝であるが、のちに東岸を杭と細枝のしがらみで護岸する。しがらみと岸の間には裏込めのために大量の瓦をつめこんでいた。SD 1250・SD 10950の堆積土は同じで4層にわかれ、第2層以下は水流による堆積土で、第1層は埋めたてた土である。ただSD 1250の朱雀大路の部分は埋土が異なり、他の部分と埋め戻しの時期が異なる。

第130次と今回の調査によって、平城京条坊制の基点となる二条大路北測溝と朱雀大路の東・西側溝の交点を確認し、朱雀大路の幅員が73.80 m（側溝心々距離）であることが明らかとなった。この数値は六条で確認した同幅員72mより少し広いことになる。

南区の東西トレンチ部分は、大垣の壕地に当り、大垣に近い北辺部には3層の整地層があり、SD 1250に向って緩く傾斜する。

遺物は、瓦が主にSD 1889とSD 10950のしがらみ裏ごめから大量に出土した。軒瓦はほぼ9割が藤原宮式で、他の大垣地区の調査と同一の結果である。ほかにSD 1889から太刀の鞘尾金具、SD 10950から「阿波国麻殖郡川嶋郷少楮里」の庸米荷札など木簡2点や人形が出土した。

まとめ　北区では、南面大垣が、南辺を破壊されていたが、比較的良好な状況で遺存していた。今回新しく築地の構築に伴なう堰板溝を検出し、築地の北端を確認した。東半では後に築地幅を拡幅していることが明らかになった。さらに他の調査区とは異って、掘りこみ地業を行なわない場合もあることが明らかになった。

南区では、第130次調査とあわせて、朱雀大路の東・西側溝が二条大路を横断して二条大路北側溝に接続し、さらに同北側溝が規模を小さくしながらも、朱雀大路を横断していることが明らかになった。そして何よりも、条坊制の基点となる朱雀大路東・西側溝と二条大路北側溝の交点を確認し、朱雀大路の路肩が明らかになったことが、今回の調査の大きな成果である。

補足調査　南面大垣の整備に伴う事前調査。調査地は南面西門西の約80mの大垣壕地。第133次調査検出の園池SG 10240の排水路の有無を探るため発掘。顕著な遺構はなく、SG 10240の排水路は南面西門西12mのSD 10250が唯一と判明。

3　推定第一次朝堂院地区の調査　第140次

調査経過・調査目的

推定第一次朝堂院地区（以下推定を略す）の調査は、昭和42年度以降継続的に進めている。昭和42度の第41次調査、昭和47年度の第77次調査では北面の様相を明らかにし、昭和51年度から53年度にかけての第97・102・111次の各調査では東第一堂・東第二堂北半部および東面を画す施設を検出、昭和54年度の第119次調査で南門および南面を画す施設を確認し、昭和56年度の第136次調査では、この地区の東南隅の様相を明らかにした。これらの調査結果から、第一次朝堂院の規模は東西が約214ｍ（720尺）、南北が約284ｍ（960尺）に復原できる。今回の調査は、第111・136次の両調査区にはさまれる約5600㎡の区画で、東第二堂の規模・東第二堂の南側の状況・第一次朝堂院と第二次朝堂院とにはさまれる地域の状況などを明らかにする目的で実施した。

地形および遺構の概要

本調査区は、南北にのびる奈良山丘陵の1小支丘の東南部にあたる。その支谷から下った谷筋の堆積土の上面に古墳時代の包含層が乗る。この包含層の上面が宮造営時の地山面で、東・南になだらかに傾斜する。調査区における高低差は東西方面向約40㎝、南北方向で約30㎝で、宮の造営に際し整地している。整地後の傾斜は整地土が大部分後世の削平を受けており不明である。すでに第111次調査までに大きくみて4層の整地土が確認されており、本調査区でもそれらに対応する整地土がある。下から順に第1次整地～第4次整地とする。第1次整地は灰色砂礫土を主体とし、東第二堂SB 8550の東に広がりをもつ。第2次整地は黄白色粘土を主体とする。第2次整地後に、第一次朝堂院の東を画す塀SA 5550を作る。SA 5550の西側では、第2次整地層上に第3次整地の暗灰色砂土を積み、その上面から東第二堂SB 8550の掘込地業をおこなう。第4次整地は第一次朝堂院廃絶後のもので、SB 8550とSA 5550の両基壇にはさまれる窪みを、瓦片を多量に含む暗灰色砂礫土で埋める。

本調査地区のうち南半部は後世に削平を受け第１次整地土が部分的に残るのみであり、上から順に旧耕土・床土・瓦器片を包含するバラス層があり、その下の古墳時代遺物包含層暗褐色土層上面で奈良時代の遺構を検出した。北半部でも削平を受けSA 5550の東側には第１次整地層のみが残る。

横出した遺構は、その重複や配置関係などから以下の９期に区分できる。

Ａ期　第１次整地以前の時期。古墳時代の竪穴住居跡５棟・土拡２基・自然流路３条および宮造営直前の道路側溝１条がある。

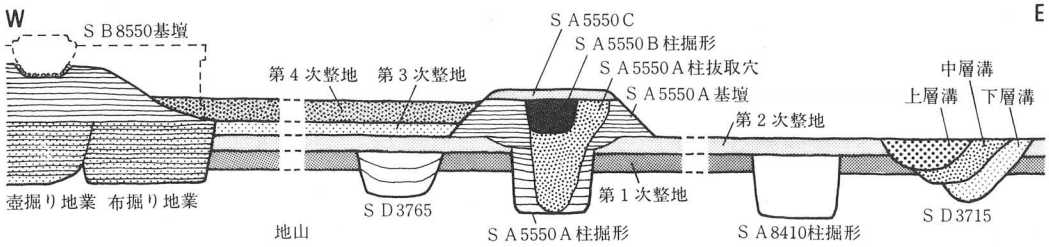
SB 10762・10798・10799 A・10799 B・10803は古墳時代の竪穴住居跡である。SB 10798 は長辺 6.6 m・短辺 5.8 mの矩形で、南辺中央に貯蔵穴を有す。５世紀前半の土器・滑石製有孔円板が出土した。SB 10799 A は長辺５m・短辺 3.8 m の矩形である。SB 10799 Bは SB 10799 Aをほぼ同位置で建て替えたもの。長辺５m・短辺４mの矩形で、SB 10798 と同時期。SB 10762 と SB 10803 は規模不明で土器も出土していないが、他の住居跡と近い時期であろう。

土拡 SK 10811 からは５世紀末～６世紀初頭の埴輪が多量に出土した。古墳の周溝の一部の可能性がある。土拡 SK 10810 からも埴輪が出土したが量は少ない

SD 10797・10804・10805 は古墳時代の自然流路で、SD 10805 からは多量の土師器が出土した。SD 1860は大和盆地を南北に貫く下ッ道の東側溝で、幅約 0.6 m・深さ約 0.1 m。

Ｂ期　第１次整地後から第２次整地以前の時期。第一次朝堂院区画の建設前にあたり、溝１条・塀１条がある。

南北溝SD 3765は、この時期における宮中央部の基幹排水路である。素掘りで幅約 1.7 m・深さ 0.7 m。３層の堆積が認められたが、遺物は出土しなかった。



第６図　調査区北部の整地土と遺構の関係　模式図

南北塀SA 8410は、SD 3765の東約17.5 mに位置する柱掘形列である。掘形の大きさは一様でなく、1辺1.0 ～ 1.6 mの矩形で、間隔は約3 m。26間分を検出した。柱掘形には柱痕跡がなく、掘形を掘った直後に、埋めもどしたと考える。

C期　第2次整地後から第3次整地以前の時期。第2次整地によってSD 3765・SA 8410を埋め、南北塀SA 5550 Aをつくり第一次朝堂院を区画し、東に南北溝SD 3715を掘削する。

南北塀SA 5550 Aは第一次朝堂院の東を画す掘立柱塀である。今回26間分を検出し、過去の調査分と合わせて全体の規模が96間と判明した。掘形の掘削は第2次整地層上面のSA 5550建設予定位置に、幅約2.2 m・深さ約0.2mの浅い溝を南北に掘り、掘形を揃える目標としたのち行っている。掘形は長辺約1.6 m・短辺約1.4 mの矩形で、柱間は約2.96 m等間である。柱を建てたのち、幅約4.4 m・高さ約0.25 mの基壇を構築する。

南北溝SD 3715は、SA 5550の東約17.5mにある。第一次朝堂院と第二次朝堂院の間を流れる基幹排水路で、SD 3765の付け替えである。2回の改修の跡があり上層・中層・下層の3時期に分れる。下層溝は、西肩が中層溝で切られ当初の溝幅は不明。深さ約0.6 m。出土した土器は平城宮Ⅲを下限とし、奈良時代中頃まで存続した。中層溝は、下層溝を埋めたのち、下層溝より約1.2 m西に偏して掘削する。西肩が上層溝で切られ当初の溝幅は不明。深さ約0.4 m。出土土器は平城宮Ⅴを下限とし、奈良時代末まで存続した。上層溝は、中層溝を埋めた後に掘削する。調査区北辺部では下層溝とほぼ同位置だが、それより以南では中層溝より約1 m西に偏す。幅約1.4 ～ 2.4 m。深さ約0.4 m。平城宮Ⅶの土器を出土し平安時代初頭まで存続する。

D期　第3次整地以降、奈良時代末までの時期である。D期の遺構はさらにD_1 ～ D_4の小期に区分できる。ただしこの期の遺構が集中する調査区南半は後世の削平を受けており、整地層を基準にした区分が不可能なため、遺構の重複関係や出土遺物に基づいて区分した。

D_1期　第一次朝堂院内郭に第3次整地をおこない、東第二堂SB 8550を築く。

東第二堂 SB 8550 は、礎石建ち東西廂付南北棟建物である。基壇を検出した。基壇積土が南北40m・東西14mの範囲に残っている。基壇の南辺部・西辺部では、後世の削平のため積土は残っていないが、基壇の範囲に掘込地業を行っているため、基壇規模は判明する。基壇積土上面で礎石据付跡を検出した。建物規模は今回桁行 9 間分検出し、第 102 ・ 111次調査検出分を合わせて桁行21間・梁間 4 間と判明した。

基壇の復原規模は南北長約97m・東西幅約18m。残存高は約 0.5 m である。基壇外装は残っておらず、地覆石に接して基壇の周囲にめぐらした礫敷 SX 10795 が一部に残る。礎石はすべて抜き取られていたが、礎石据付跡が12ケ所あり柱間寸尺がわかる。柱間寸法は、桁行約 4.4 m（15尺）等間、梁間約 3.2 m（11.0尺）等間で、桁行総長が 92.4m（315 尺）、梁行総長が 12.9 m（44尺）となる。礎石据付け手順は、基壇築成がある程度まで進んだ段階で皿状に掘り込み、川原石を詰めて根固めし、その上に礎石を据える。

SD 8555は SB 8550建設の際の足場穴である。柱位置の四周・棟通り・軒先に 1 辺約40cmの方形の掘形がある。抜取穴はみられない。

この基壇の掘込地業部分は東西幅約19mで、第 3 次整地層上面より掘り込む。非常に複雑な工程をとっており、まず基壇の予定範囲のうち、その南端部を除いた範囲の東西両端に幅 1 ～ 2 m・深さ約 0.4 ～ 0.5 m の南北方向の布掘りを行う。

この 2 本の布掘りの間に深さ約 0.3 ～ 0.4 m の東西方向の布掘りを中間をとばして悌子状に行う。基壇南端部には、長さ約19m・幅約 3 m・深さ約 0.4 mの東西方向の布掘りを行う。この布掘りと北接する布掘りとの間には、半月形に地山を掘り残した部分が東西に 1 つづつあるが、これはちょうど柱位置にあたる。第 102 ・ 111次調査区では、東西方向の布掘りの幅が約 2.6 m、布掘り間の間隔が約 2 mで一定していたが、本調査区では布掘りの配置間隔が北から 4 本目より乱れている。布掘り施工事の縄張りの誤りであったのか、特別の事情があったのか理由は明らかでない。さらに、その東西方向の布掘りの間にも、その両脇に側柱と入側柱 2 本分をカバーする坪掘りを行っている。坪掘りの東西長は 4.7 ～ 5.4

mあり、南北幅は最小のもので1.8 m、最大のもので3.1 m、深さ約0.4 mである。坪掘り地業・布掘り地業の位置と基壇上面の柱位置とは一致しない。

SX 9015は、SB 8550の掘込地業の西肩から西約0.2 mに位置する南北方向の杭列で、間隔が大小交互に反復し、基壇版築を行う時の堰板止めと考えられる。

東西溝 SD 10790と斜行溝10800は、SB 8550の掘込地業部分から出る溝で、掘込工事に際して排水用に掘った溝である。いずれも軒先の足場穴より古く、掘込地業完了後すぐに埋めもどした。SD 10790は幅約0.9 m・深さ約0.9 mで、SA 5550 Aの基壇を切り、SD 3715下層溝に注ぐ。溝底はSB 8550の掘込地業の底面より約0.4 m深い。SD 10800は幅約0.6m・深さ約0.2 mで、掘込地業の東南隅からはじまり、SA 5550 Aの西雨落溝SD 8392におよぶ。SD 10790から平城宮ⅠないしⅡの土器が出土し、SD 10800から軒丸瓦 6303B 型式が出土した。

南北溝 SD 8392はSA 5550 Aの西側雨落溝で、第3次整地面にあり、幅約0.6 m・深さ約0.2 mである。

東西溝 SD 10701は、SD 3715から西に分岐する。幅約1.2 m・深さ約0.4 m掘削後すぐ埋めもどす。埋土より平城宮Ⅱを下限とする土器が出土した（第8図1）SD 10707に切られ西方での流路は不明。

D_2期 東第二堂に変化はないが、東第二堂の南に仮設建物を建て朝堂院を画する塀に改修を加える。また、東外郭に官衙を設ける。

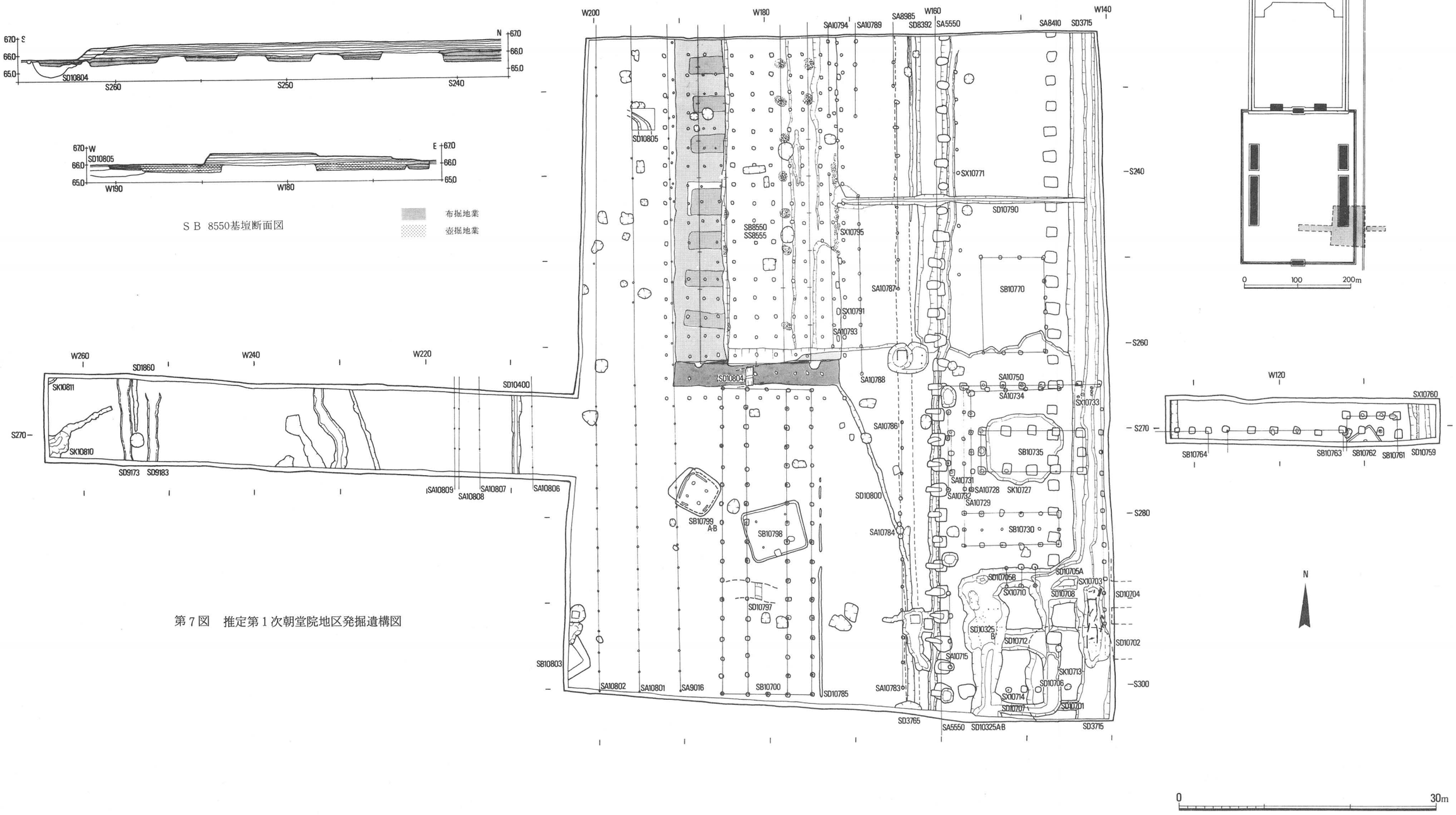
SA 5550を改修する。SA 5550 Aの柱を基壇上面より抜き取り、ほぼ同位置に掘立柱塀SA 5550 Bをつくる。SA 5550 Bは2.96 m等間であるが、柱掘形が1辺約0.7 m・深さ約0.6 mと小さく仮設的なものと考える。SA 5550 Aの抜取穴より平城宮Ⅲの土器が出土したことからみて、SA 5550 AからSA 5550 Bへの改修は奈良時代中頃である。

SB 10700はSB 8550の基壇のすぐ南に接して建つ掘立柱の二面廂付南北棟建物である。桁行16間約2.2 m（7,5尺）等間、梁間4間約2.6 m（9尺）等間で、SB 8550と東側柱筋を揃える。平面規模にくらべて柱掘形が極端に小さいことか

ＳＢ 8550基壇断面図

布掘地業

壺掘地業



第７図　推定第１次朝堂院地区発掘遺構図

らみて仮設建物と考える。SD 10785 は SB 10700 の東雨落溝で、幅約 0.3 m、深さ約 0.1 m。SB 10700 の柱掘形から平城宮Ⅲの土器が出土し、SD 10785 からは平城宮第Ⅳ期の軒平瓦 6801 A型式が出土した。したがって、SB 10700 の年代は、奈良時代中頃を上限とし後半に及ぶ時期に収まる。

SA 9016 ・ 10801 ・ 10802 は、SB 8550 ・ SB 10700 の西側にある、南北方向の杭列である。約 4.6 m間隔で 3 条が平行して並び、柱筋を揃える。柱間は約 2.4 m（8 尺）。南端は SB 10700 の南妻とほぼ揃い、北端は未確認だが第 102 次調査区にものび、南北長は 170 m以上となる。平安時代の絵巻物をもとに考えると、宮中での競馬や騎射の行事に用いた馬場の柵の可能性がある。

SA 10806 ・ 10807 ・ 10808 ・ 10809 は SA 10802 のさらに西に位置する南北方向の杭列である。平行して並び柱筋をほぼ揃えるが、杭列間の間隔は不揃いである。SA 9016 ・ 10801 ・ 10802とほぼ同じ機能をはたしたと考えるが、同時に用いたかどうかは、一部を検出したのみであり断定できない。

第一次朝堂院東外郭には、掘立柱建物 1 棟・掘立柱塀 2 条を設け、SD 3715から西に屈曲した枝溝を掘削する（第 8 図 2）。SD 3715の東側にも掘立柱建物を 3 棟つくる。

SB 10735 は掘立柱の東西棟建物で、桁行 4 間、約 2.95 m（10尺）等間・梁間 2 間約 2.4 m（8 尺）等間である。東妻の柱掘形が SD 3715中層溝に切られ、SD 3715 下層溝と併存する。したがってD期以前に遡る可能性もある。

SA 10728 は SB 10735の西約 1.2 m（4 尺）にある掘立柱の南北塀で 5 間分検出した。柱間は約 2.2 m（7.5 尺）等間。S A 10731 は SA 10782 の西約 2.4 m（8 尺）にある掘立柱の南北塀で 2 間分検出した。柱間は SA 10728 と同じ。

SD 10705 は SD 3715から西に枝分れする東西溝で、幅約 2 ～ 3 m・深さ約0.5 m。上下層 2 層に分れ、下層溝 SD 10705 Aは出土土器が平城宮Ⅲを下限とすることから本期に属す。

SD 10706 は SD 10705 が南へ折れ曲った南北溝で、北半は幅約 1.2 m ・深さ約 0.5 m、南半の幅約 2.2 m・深さ約 0.9 m。溝の堆積は 3 層に分かれ平城宮第

Ⅲ期を下限とする軒瓦（6225C・6691A）が出土。

SD 10707は SD 10706がさらに西へ折れた東西溝で、幅約1.8 m ・深さ約0.5 m。出土土器は平城宮Ⅲを下限とする。

SD 10325 Aは第136次調査ではじめて検出した南北溝で、幅約3～4 m・深さ約0.7 m。第136次調査域では平城宮Ⅳ・Ⅴの土器を出土し、SD 3715中層溝を切るので、この溝の年代を奈良時代末と考えたが、上記の3条の溝との関連から平城宮Ⅲの時期にはすでに存在していたと考える。

SD 10702 は幅約4 m・深さ約0.6 mの東西溝で、発掘区東壁でその存在を確認した。遺物は出土していないが、埋土がSD 3715中層溝に併存する南北塀ＳＡ 10726に切られ、溝底の高さがSD 3715下層溝と等しいため、SD 3715下層溝と併存すると考える。

SX 10714 は SD 10707 の北側にあり、柱掘形が3基、約1.8 m（6尺）間隔で並ぶ。位置がSB 10375 の西から2間目の正面にあたり、SD 10707にかかる橋の可能性もあるが、南岸には見合う柱穴がない。

D期の期間中に SD 10705 Aを埋めやや南の位置に SD 10708を設け付け替える（第8図3）。SD 10708は幅約2 m・深さ約0.3 mの東西溝で、SD 10705 Aの埋土を切る。SD 10704はSD 3715をはさんで SD 10708の対岸にある東西溝で幅約3 m・深さ約0.4 m。発掘区東壁でその存在を確認した。遺物は出土していないが、埋土がSD 3715中層溝に併存する南北塀 SA 10726に切られ、溝底の高さがSD 3715下層溝と等しいのでSD 3715下層溝に併存すると考える。

SD 3715とこれら2本の東西溝との交点のやや南には、溝底を横断して約1 mの堰 SX 10703を置く。堰から南6 mの区間の両岸には堰と同幅の護岸用側壁を設ける。

SD 3715東方の SB 10761は掘立柱建物で、総柱ないし北廂付になる。東西方向3間、柱間約1.9 m（6.5尺）等間。南北方向の柱間は約1.8 m（6尺）。

SB 10763は掘立柱の東西棟建物で、桁行5間約2.7 m（9尺）等間。

SB 10764は掘立柱建物の北側ないし北妻で、柱間は約1.8 m（6尺）。

SB 10763 ・ SB 10764 は SB 10735 と柱筋を揃え同時期であろう。SB10761 は SB 10763 に切られていることからみて、D期以前となる。

SD 10759 は素掘りの南北溝で、幅 3.2 m 以上、深さ約 0.3 m。西岸には抗列 SX 10760 を置く。第91次調査で検出した南北道路 SF 8950（第二次内裏西外郭の南門に通ず）の西側溝 SD 8947 は、この溝の西方約 4 m に位置しており、SD10759 が SF 8950の東側溝の可能性がある。

D_3期　東第二堂に変化はないが、朝堂院を画す塀を改修する。東外郭官衙の北を画す塀を作り、官衙内を改造する（第 8 図 4）。

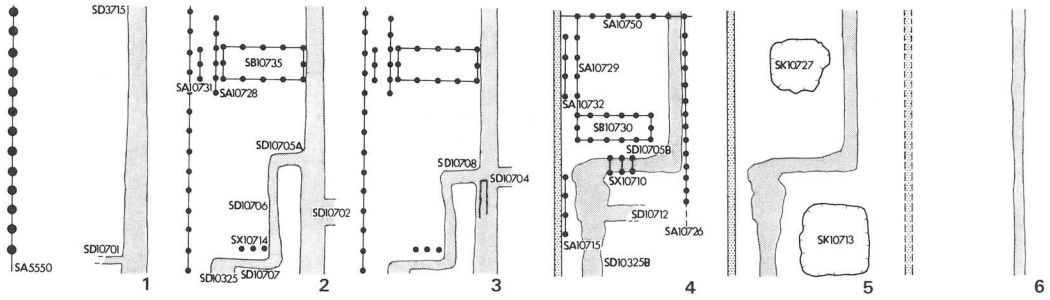
SA 5550を再度改修する。SA 5550 B の柱を抜き取り、築地 SA 5550 C を作る SA 5550 C の盛土は、本調査区では厚さ 5 cmほど残るにすぎない。

SD 9173は第 119 次調査で検出した南北溝で、朝堂院南門 SB 9200の基壇東側に達す。幅 1.5 m ・深さ約 0.1 m。

SD 10400 は第 136 次調査で検出した南北溝で掘削年代は不明である。第一次大極殿院の東隣 SB 7802の東妻と位置がほぼ一致し、C 期ないし D 期に遡る可能性もあるが、平城宮Ⅳ・Ⅴの土器を出土したことからみて D 期に埋めている。

朝堂院外郭の SA 10750 は掘立柱の東西塀で 8 間分検出した。柱間は約 2.2 m（7.5 尺）等間。SB 8550の基壇南縁とほぼ同位置にある。西端は SA 5550に接し、東端は SD 3715 東岸に及ぶ。柱掘形が SD 3715 下層溝の埋土を切り、上層溝に切られているので、中層溝と併存する。

SX 10733 は SA 10750 と SD 3715中層溝との交点のすぐ南に接して作られた



第 8 図　第一次朝堂院東外郭官衙変遷図

施設で、東西両岸に長さ 1.5 mにわたり凝灰岩を並べる。石列の間隔は 0.8 m。暗渠の可能性がある。

SB 10730 は掘立柱の東西棟建物。桁行 5 間約 2.2 m（7.5 尺）等間、梁間 2 間 1.9 m（6.5 尺）等間で棟通りに床束があって床張り。SA 10750 と柱筋を揃え、約15m（50 尺）離れる。

SA 10729 は掘立柱の南北塀で、SA 10750 と SA 10730 をつなぐ。5 間あり柱間は約 3 m（10 尺）等間。

SA 10715 ・ SA 10732 はSA 5550のすぐ東にある掘立柱の南北塀で、ともに 3 間分あり中間 4 間分があく。柱間は約 3 m（10 尺）等間。SA 5550 Aの柱抜取穴を切り、SA 5550Cと併存する。

SA 10726 はSD 3715中層構の東岸にある掘立柱の南北塀で北端は SA 10750 に接す。14間分検出したが、南端は土拡 SK 10713 に切られ不明。柱間は不揃いで約 1.6 ～ 2.6 m。

SD 10705 BはSD 10705 Aを西方に延長した素掘りの東西溝で、SD 3715中層と一連のもの。幅約 2.5 m・深さ約 0.4 m。平城宮Ⅳ・Ⅴの土器と平城宮第Ⅲ期の軒瓦（6225 A・6663 C・6732 C）が出土。

SX 10710 はSD 10705 Bにかかる橋で、桁行 1 間・梁間 2 間・柱間は桁行が約 2.1 m、梁間が約 1.7 m。橋の中心は SB 10730 の東から 3 本目の柱筋に揃えSA 5550と SA 10726 の中間に位置する。柱痕跡より平城宮第Ⅲ期の軒瓦(6133・6282 Bb)が出土。

SD 10325 BはSD 10325 Aを北に延長した素掘りの南北溝で、幅約 2.4 ～ 5 m・深さ約 0.5 m。4 層に分れる。平城宮Ⅴを下限とする土器が出土。

SD 10712 は素掘りの東西溝で、東端は土拡 SK 10713 に切られ不明。幅約2.4 m・深さ 0.4 m。掘削後短期間で埋めもどした。埋土より平城宮Ⅳ・Ⅴの土器が出土した。

SD 3715中層溝は、D_3・D_4期にはSD 10705 との交点以南には及ばずSD10705B → SD 10325 Bへの流れがこの期の水路本流になる。第 136 次調査区では、SD

10325 Bが再び東へ曲がりSD 3715中層溝の埋土を切ってもとへもどる。

D_4期　朝堂院内郭に変化はなく、東外郭に大きな土拡を掘る（第8図5）。宮の廃絶に近い時期。

SK 10727は隅丸方形の土拡で、東西約9 m、南北約8 m、深さ約0.3 m。埋土より平城宮Ⅳ・Ⅴの土器が多量に出土した。

SK 10713は隅丸方形の土拡で、東西約10m、南北約10m、深さ約0.3 m。SD 3715 中層溝・SD 10712の埋土を切り、SD 3715上層溝に切られる。埋土は上下2層あり、下層出土土器は平城宮Ⅳを下限とし、上層出土土器は平城宮Ⅴを下限とする。これらの土拡は採土のために掘ったもので、SK 10713の掘削はD期に上る可能性もあるが、ともに奈良時代末に埋められている。

E期　SB 8550・SA 5550の存否は不明であるが、存在しない可能性がある。SD 9173の東約2.5 mにSD 9183を掘削し、東外郭に建物SB 10770を作り、SD 3715上層溝を掘削する。

SD 9183は等119次調査で検出した南北溝で、幅約1.2 m・深さ約0.1 m。

SB 10770は桁行5間・梁行3間の南北棟建物で、北・東・南・の3面の掘立柱のみ検出した。身舎の柱位置を直接に示す痕跡はないが、礎石建ちと考える。身舎は桁行柱間約1.8 m（6尺）、梁間柱間約2.2 m（7.5尺）と考えられるのに対し、廂の出は大きく約2.8 m（9.5尺）。

F期　朝堂院廃絶から第4次整地がなされるまでの時期。

SX 10791は、SB 8550の掘込地業の東肩上に並ぶ円形ないし隅丸長方形の土拡群である。埋土に炭化物がまじり、第111次調査で検出した鋳造工房に関係する遺構と考える。

SA 10793・SA 10794はSX 10795の西約0.6 mにある掘立柱の南北塀で、柱間寸法は不揃いである。SA 10788・SA 10789はSA 10793・SA 10794の東約3 mにある。柱立柱の南北塀でSA 10793・SA 10794と柱筋を揃える。ともに第111次調査では検出していない。これらの塀は柱掘形の埋土中に炭化物がまじりSX 10791と併存すると考えられる。

G期　SB 8550とSA 5550間の窪みを、大量の瓦片・礫を含む暗灰砂質土で埋む。

時期不明　SA 10783・SA 10786はSA 5550の西約4.2～4.5 mにある南北塀SA 10786が3間分、SA 10783が5間分あり、中間が約7 m（24尺）あく。ともに約3 m（10尺）等間。東外郭のSA 10715・SA 10732にともない中央のあいている部分が東外郭から内郭への通路となる可能性がある。SA 10784は、SA 10783・SA 10786の間にあり、目隠塀の可能性がある。

SA 10787はSA 5550の西約4.5～4.6 mある南北塀で7間分ある。柱間は約3.1 m（10.5尺）等間。SA 8985はSA 5550の西約5～5.2 mにある掘立柱の南北塀で、第111次調査の検出分と合わせて10間分となる。柱間は不揃い。これら2条の塀はSA 5550と併存しC～D期に属す可能性がある。

SX 10771はSA 5550の東約2.3 mにある柱穴列で、SA 5550の柱位置の中間に柱掘形がある。SA 5550建設の際の足場SS 10771の可能性がある。

遺　物

奈良時代の遺物は木簡・瓦塼類・土器・木製品などがある。そのほか古墳時代土器・埴輪など宮造営前に属する遺物や、平安時代に降る遺物もある。

木簡　総数757点出土した。内訳はSD 3715下層溝より417点、SD 10705 Aより1点、SD 10706より39点、SD 10325 Bより300点である。以下に主な釈文を掲げる。2は弾正台関係のものである。第136次調査ではSD 3715・SD 10325より「弾正」「刑省」と記した墨書土器や弾正台の官人名と考えられる木簡が出土しており、弾正台の位置を考える資料となる。

1. 民部省移　　（SD 3715）
2. （表）山　京橋造不状
   □□　少疏倉人
   〔巨勢朝ヵ〕
   □□□□臣
   （裏）　□□□□　□□□

又十二日宣受史生土

十九日弾正台口宣□□

東宮南道　　表裏天地逆

□　　SD 10706

3.　（表）　西大宮正月佛　御供養雑物買□銭

（裏）　一貫五百六十文油五升□□　正月十六日添石前

4.　中衛府

5.　衛門府

6.　左兵衛府奏　□□□

□□　　□□　　（SD 10325）

瓦塼類　内訳は軒丸瓦（353点）、軒平瓦（194点）、丸・平瓦（1500袋）、鬼瓦（4点）、熨斗瓦（2点）、面戸瓦（14点）、塼（9点）である。軒瓦の大半は、朝堂院内郭ではSA 5550とSB 8550の空閑地を埋める第4次整地層、外郭ではSD 3715と枝溝群から出土した。時期別の内訳は第8図の通り。

内郭では第Ⅱ期の瓦が多いが、軒平瓦は少なく、軒丸瓦6313 型式が93点あるそのほか第Ⅰ期の6284（16点）－6664（D・F以外、32点）の組み合わせ、第Ⅲ期の6225（33点）－6663（10点）の組み合わせが多い。外郭では第Ⅰ期の6284（30点）－6664（D・F以外、19点）の組み合わせ、第Ⅲ期の6225（60－6663（28点）の組合わせが多く、第Ⅱ期の軒丸瓦6311（44点）・6304（12点）も多い。

土器・土製品　奈良時代の土器は、朝堂院内郭からほとんど出土しない。これはこの地区の性格と関連しよう。SD 3715と枝溝群からは多量に出土した。東外郭官衙からの廃棄物を含むのであろう。墨書土器はSD 10705 A・SK 10713などから計11点出土。判読できるものは5点。「是」「足」など多数の字を記したもの1点、他は「大」「方」「十」など一字を記す。蹄脚硯はSD 3715と枝溝群およびSK 10713から計17点出土。

古墳時代の土器は、SB 10798・SB 10799・SD 10805より多く出土し、多

少の幅はあるものの平城宮第二次朝堂院東朝集殿下層の古墳時代溝上層出土土器の時期に収まる。須恵器は含まないが、他地域ですでに須恵器の出現している時期にあたる。

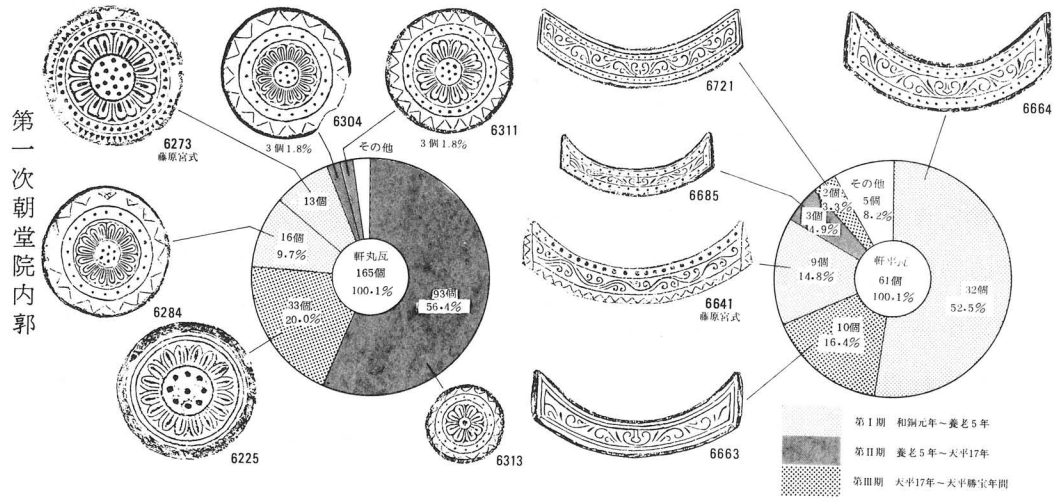
木製品　木製品は SD 10325 Bより木箱の身・蓋各1、皿2、人形1が出土。

ま と め

今回の調査の成果と問題点は以下の通り。

①　第一次朝堂院東第二堂の規模が判明した。

②　東第二堂の南側には基壇建物がなく、第一次朝堂院には長大な南北棟を東西に各2堂合計4堂配置していることが確定した。これは難波宮・藤原宮・平城宮第二次・長岡宮・平安宮の各朝堂院が、朝堂を8堂ないし12堂配置するのと異なる。平城宮の第1次朝堂院・第二次朝堂院が併存するとすれば、東側に12堂を有す1院・西側に4堂を有す1院が併存することになり、平安宮の朝堂院・豊楽院の配置と似る。したがって第一次朝堂院の性格を平安宮における豊楽院相当のものとする見解も成立し得る。しかしこの問題については第二次朝堂院地区が未調査で同地区の成立年代が確実でないため、今後の同地区の調査成果と合わせて検討することが必要である。



第9図　第一次朝堂院地区の軒瓦

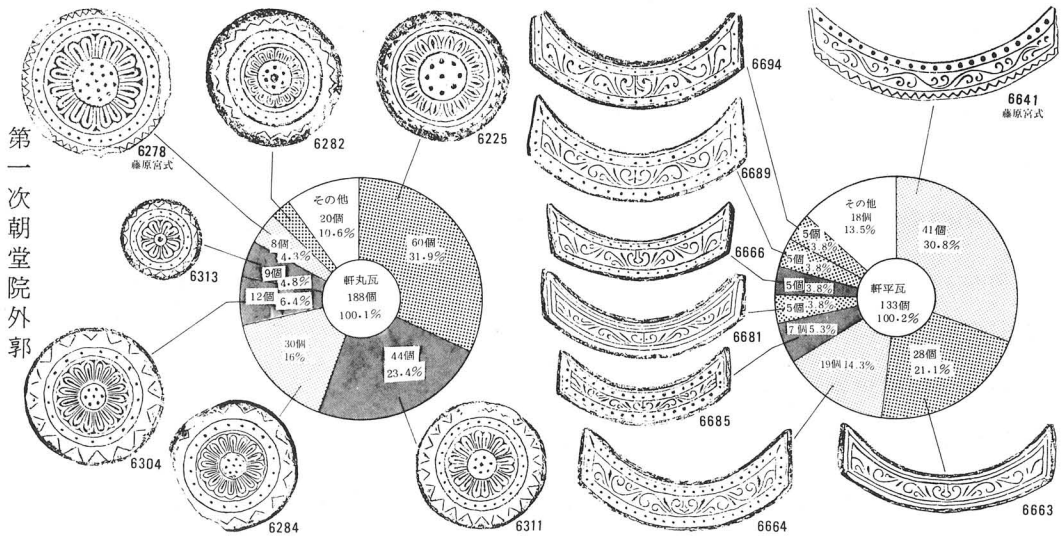
③　東第二堂の南に、第二堂と東側柱筋を揃える掘立柱の仮設建物を検出し、仮設建物および第二堂の西側で3条の杭列を南北170m以上検出した。これらの遺構は、平安宮の事例を参考にすると、宮中で催された競馬や騎射の行事に用いられた施設の可能性がある。

④　第一次朝堂院東外郭にあらたに官衙域を検出した。この官衙の性格については今後の検討を要するが、SD 3715・枝溝群出土の木簡・墨書土器に弾正台関係のものがあり、この官衙の性格を考える上で重要である。

⑤　5世紀前半代の古墳時代集落の存在が明らかとなったが、範囲は確認できなかった。

今回の調査で第一次朝堂院地区東半部の調査は終了し、この地区の全貌をほぼ明らかにすることができた。従来からの調査成果の一部に再検討を加えたのちに奈良時代におけるこの地区全体の変遷を概観しよう。

第119次調査では、朝堂院の南面を画す塀について、SA 9199→SA 9201 A・SA 9202 A→SA 9201 B・SA 9202 B→築地塀の変遷を考えた。しかしSA9199は第136次調査の成果からみて、SA 9201 Aにともなう布掘地業、SA 9201 A・SA 9202 AはSA 8410と一連で柱痕跡のない柱掘形列と考えた方がよい。第119



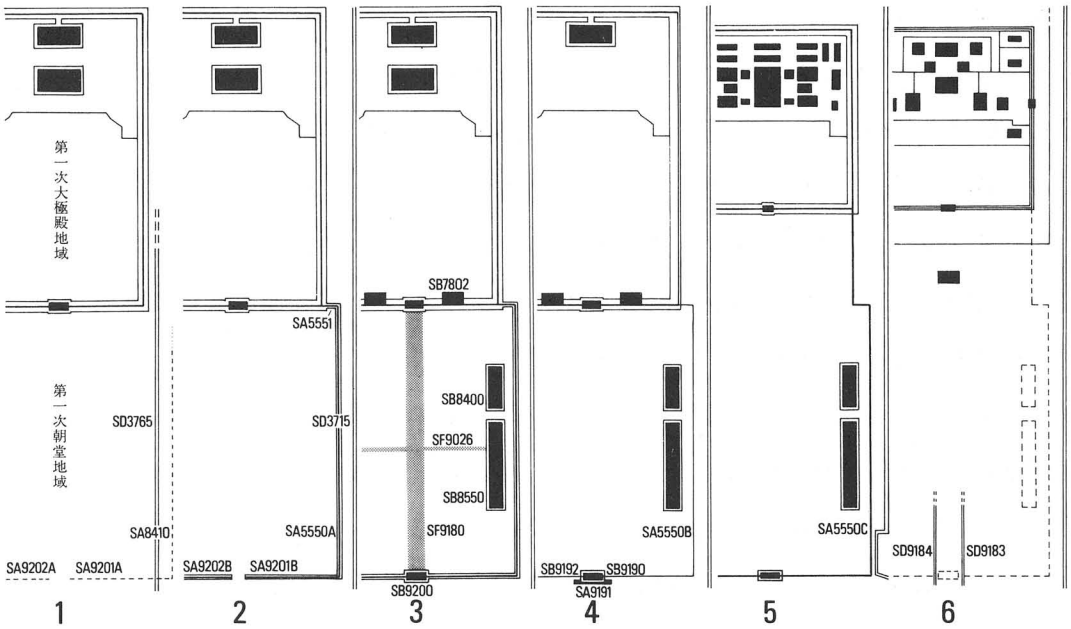
次調査では、朝堂院南門SB 9200の掘込地業下で検出した柱穴をSA 9201 A・SA 9202 Aのものとしたが、これには柱抜取痕跡があるため、SA 9201 B・SA 9202Bのものとした方がよい。そう考えると当初SA 9201 B・SA 9202 Bの間に閉塞施設がなく、後にSA 9201 Bの西2間分、SA 9202 Bの東2間分を撤去してSB 9200を建てたことになる。

A期　和銅創建当初の短期間の時期。第97・111次調査区西寄りに細い東西溝4条がある。造営に先立つ地割のための溝の可能性がある。

B期　（第10図1）　第一次整地をおこない最初の造営が始まった時期。第一次朝堂院区画の建設前にあたり、第一次大極殿地域の第Ⅰ－1期に相当する。基幹排水路としてSD 3765がある。この溝は、第一次調堂院の中軸線の東約102m、（348尺、大290尺）にある。朝堂院の東面・南面を画す施設としてSA 8410・SA 9201 A・SA 9202 Aの柱掘形を掘削するが、いずれも柱痕跡がなく造営途時で埋めもどした。なおSA 8410の北限は未確認であるが、第一次朝堂院の中軸線より東へ約120 m（408尺、大340尺）離れた位置にあり、朝堂院の幅を約240 m（816尺、大680尺）とすれば藤原宮朝堂院の幅よりやや大きい。

C期（第10図2）　第二次整地をおこない、SD3765・SA 8410・SA 9202A・SA 9202 Aを埋めたて、推定第一次調堂院の区画（SA 5551・SA 5550・SA 9201 B・SA 9202 B)を作り、基幹排水路SD 3715を掘削する。朝堂建物はまだ作っていない。朝堂院区画の規模は東西約214 m（720尺、大600尺）・南北約284 m（960尺、大800尺）である。東面のSA 5550の柱間は約2.96 m（10尺）等間で96間ある。SD 3715は、朝堂院の中軸練の東約124.5 m（420尺、大350尺）にある。南面のSA 9201 BとSA 9202 Bの間には15mの間隔があき閉塞施設は検出していない。

D_1期（第10図3）　第3次整地後に東第一堂（SB 8400）・東第二堂（SB 8550）を造営する。SA 9201 B・SA 9202 Bの間に朝堂院南門SB 9200を造営し第一次大極殿院に東楼SB 7802を増築したのもこの時期と考える。第一次朝堂院地区が完成した時期で、第一次大極殿地域第Ⅰ－2期に相当する。C期とD期とは整地



第10図　第一次大極殿・朝堂院地区変遷図

層の違いによって区分したが、同一工事期間中の工程差の可能性がある。

SB 8400はSB 8550と梁行を揃え、桁行10間約4.4 m（15尺）等間、梁間4間約3.2 m（11尺）等間で、SB 8550と一連の掘込地業をおこなう。SB 9200は、掘込地業が東西26m・南北16mで桁行5間（柱間は中央3間15尺、両脇間10尺）、梁間2間15尺等間と想定できる。SB 9200から北へ南北道路SF 9180が延び第一次大極殿地区南門に通じる。途中から東西道路SF 9026が延び東第二堂西正面北から6間目に入る。SF 9026の位置は朝堂院の南北2等分線のやや南にあたる。

第一次朝堂院内郭の建物配置を調べよう。SB 8400・SB 8550の棟通りはSA 5500の西約21.8 mにあり、この距離は小尺の72尺、大尺の60尺に近く、朝堂院東西幅の10分の1である。またSB 8550の南妻はSA 9201Bの北約70.4 m、SB 8400の南妻はSA 9201Bの北約177.9 mあり、この距離はそれぞれ小尺の240尺・600尺、大尺の200尺・500尺にあたる。大宝大尺でラウンドナンバーを得られることは遷都当初に造営された第一次大極殿地域と一致する。第一次朝堂院が第一次大極殿院より一時期遅れて造営されたことは確実であるが、上記のこ

とからみて、遷都当初に四堂配置する計画で縄張りがなされていた可能性がある。

D_2期（第10図4）　SB 8400・SB 8550に変化はない。東面ではSA 5550Aを、SA 5550Bに改修する。南面では南門SB 9200の前面に仮設の目隠塀SA 9191とその両脇に接して結所SB 9190・9192が建つ。この期にSA 9201B・9202 Bが存続するのかSA 5550Bのような掘形の小さな塀に改修するのかは、削平のため不明である。第一次大極殿地域の第Ⅰ－3・4期に相当する。東外郭官衙の初現は確実にはD_2期であるが、D_1期に遡る可能性もある。

D_3期（第10図5）　SB 8400・SB 8550に変化はない。東面ではSA 5550Bを築地塀SA 5550Cに改修する。SA 5550CにはSB 8550の北から5間目に対応する位置に門SB 8980が開く。南面では南門SB 9200の前面の仮設目隠塀とその両脇の結所を撤去する。SB 9200の東西にはSA 5550Cに対応する築地塀があったと考えるが、削平を受け未検出である。南門基壇の両側に南北溝SD 9173・SD9174があり、築地塀の北側雨落溝としてSD 9171・SD 9172がある。第一次大極殿地域の第Ⅱ期に相当する。東外郭官衙の北限を画す塀を建て内部を改造する。

D_4期　第一次朝堂院内郭に変化はない。東外郭に大きな土拡を作る。第一次大極殿地域第Ⅱ期に相当する。

E期（第10図6）　SB 8400・SB 8550・SA 5550の存否は不明であるが、存在しない可能性がある。第119次調査の成果からみて南門SB 9205やそれにとりつく築地塀等の施設は廃絶しており、SD 9183・SD 9184がある。東外郭にはSB 10770を作り、SD 3715上層溝を掘る。第一次大極殿地域第Ⅲ期、すなわち平城上皇の遷都の時期に相当する。

F期・G期　朝堂院廃絶後には、SB 8550とSA 5550間の空閑地を一時鍛冶工房として使用し、その後第四次整地で埋めつくす。第4次整地は平安時代末に行ったと考える。

4　第一次朝集殿推定地の調査　第146次

推定第一次朝堂院地区については、これまでの各調査によって本概報Ⅰ－3に述べられているような建物配置と変遷が明らかとなった。調査は、推定第一次朝堂院東朝集殿の検出を目的として、第136次調査区の南50ｍに調査区を設定して行なった。

調査区は推定第二次朝堂院地区に伸びる丘陵から派生した、小支丘の東南部に位置する。そのため調査区の旧地形は全体に東南に向ってゆるやかに傾斜している。現状では、調査区の東が旧農業用水路を境に一段低くなっている。

遺　　構

調査区の基本層位は、上記の段差を境に、東西で大きく異なる。東では、奈良時代に2回の整地が行なわれており、上から耕作土、床土、暗褐色砂質土、黄褐色粘質土（第2次整地層）、暗灰褐色粘質土（第1次整地層）、暗灰色粘質土、青灰色シルト（地山）の順となる。各整地層上面で奈良時代の遺構を検出するとともに、地山上で古墳時代の遺構を検出した。西では、耕作土、床土、灰褐色粘質土、暗褐色粘質土の順になる。暗褐色粘質土は古墳時代の遺物を含み、暗褐色粘質土上面で奈良時代と古墳時代の遺構を検出した。検出した主な遺構は、掘立柱建物、5棟、南北溝4条、竪穴住居跡8棟、周溝1条、堰状遺構1基、土壙12基などである。これらは大きく奈良時代と古墳時代に分けることができる。

奈良時代の遺構　A、B、Cの3期に分けることができる。。

A期　推定第一次朝堂院の建設前の時期である。SD 3765はこの時期における宮中央部の基幹排水路である。素掘りの溝で幅約2.0ｍ、深さ約1.0ｍである。埋土は3層に分かれ、中、下層がA期に属する。SD 3765以東に第1次整地が行なわれる。

B期　第1次整地層上にSD 3715と掘立柱建物SB 01が造営される。SD 3715は素掘りの南北溝で、幅約3.0ｍ、深さ約0.4ｍである。SD 3765に代わる宮中央部の基幹排水路として機能するが、SD 3765も完全に埋られず、上層がこの時期に相当する。SB 01は5間×2間、9尺等間の南北棟掘立柱建物である。

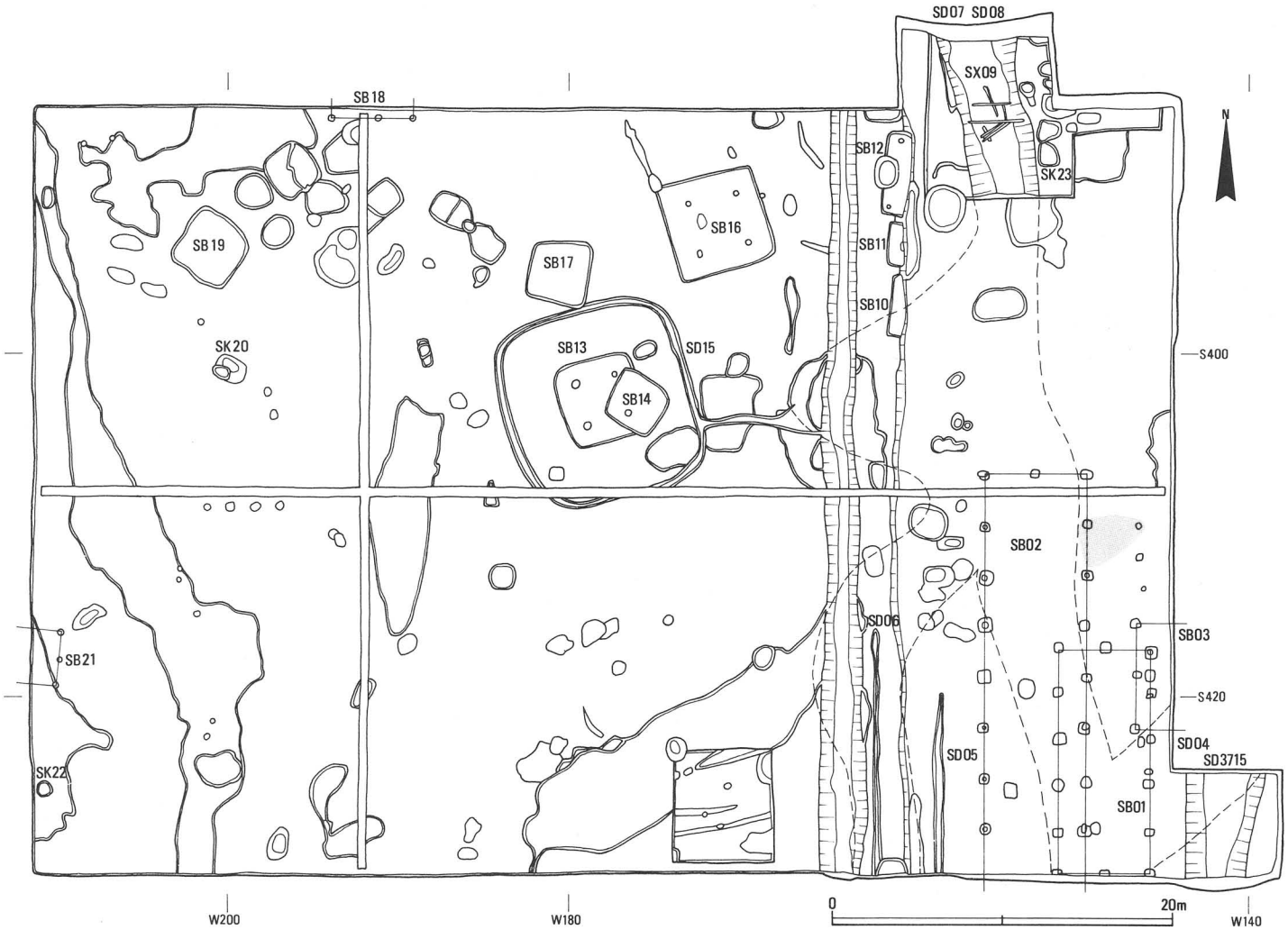
C期　第2次整地が行なわれ、掘立柱建物SB 02が造営される。SB 02は7間以上×2間、10尺等間の南北棟掘立柱建物である。第2次整地に伴って、SB 01廃絶後、その北方に須恵器甕を中心とする土器が大量に廃棄され、南北5m、東西4mの範囲に散乱している。SD 3765、SD 3715はこの時期には溝として機能しておらず、SD 3715は第2次整地によって埋立られている。第140次調査区におけるSD 3715の付け替え状況を参考にすれば、本調査区でも、さらに東へ付け替えられている可能性がある。なお梁間2間の掘立柱建物SB 03、SB 15、SB 17は方位が振れており、C期以降のものである。

古墳時代の遺構　南北溝SD 07、08は南北8mの長さにわたり発掘した。SD 07は、調査区をN10°Wの方向でほぼまっすぐに流れる。SD 08は、SD 07に一部重なり大きく蛇行しながら流れるSD 07より新しい。SD 07は幅4.0m、深さ1.1m、SD 08は幅3.4m、深さ0.8mである。SD 04については、SD 3715と重複しており、幅8.0m、深さ1.5mである。

SD 07からは、大量の土器、木器が出土した。埋土は、おおきく灰黒色粘土（上層）、暗灰色砂（中層）、灰色粗砂（下層）の3層にわけることができる。土器はいずれの層からも出土したが、灰色粗砂からの出土が多い。全体に溝の西半分に多く、東半分に少ない傾向が見られた。西方の住居跡群からの投棄と見ることができる。木器は、灰色粗砂から出土した。SD 08からは遺物の出土は少ないが、SD 07に見られなかった須恵器が少量出土している。

SD 07の底には堰状遺構SX 09が築かれる。SX 09は、両岸に掘り込まれた半円形掘り形におとし込まれた横木4本などによって構成される。SX 09周辺からも、土器、木器が大量に出土した。

竪穴住居跡は、いずれも隅丸方形である。SB 10、11、12は半分以上が削り取られている。SB 12には柱穴2個が残る。SB 13、14は重複しSB 13が古い。いずれも残りが悪く、深さは約10cmである。SB 13には、柱穴が4個残っている。周溝SD 15はSB 13に伴なうもので、東でSD 08にそそいでいる。SB 16は、最も大きな住居跡で一辺6mを計る。4個の柱穴にはいずれも柱根が遺存しており、



第11図　第１次朝集殿推定地発掘遺構図

床面から柱根の下端まで約70cmを計る深いものである。SB 17は、東南隅でSD 15と重複し、SD 15が古い。住居跡内からは、人頭大の石が投げ込まれたような状態で出土している。SB 19は、最も残りが良く床面まで60cmを計る。住居跡内からの遺物の出土は少なかったが、住居跡の重複や配置によって、大きく二時期に分けることができる。A期にはSB 11、13、19の3住居跡が、B期には、SB 10、12、14、16、17の4住居跡が属する。

遺　　物

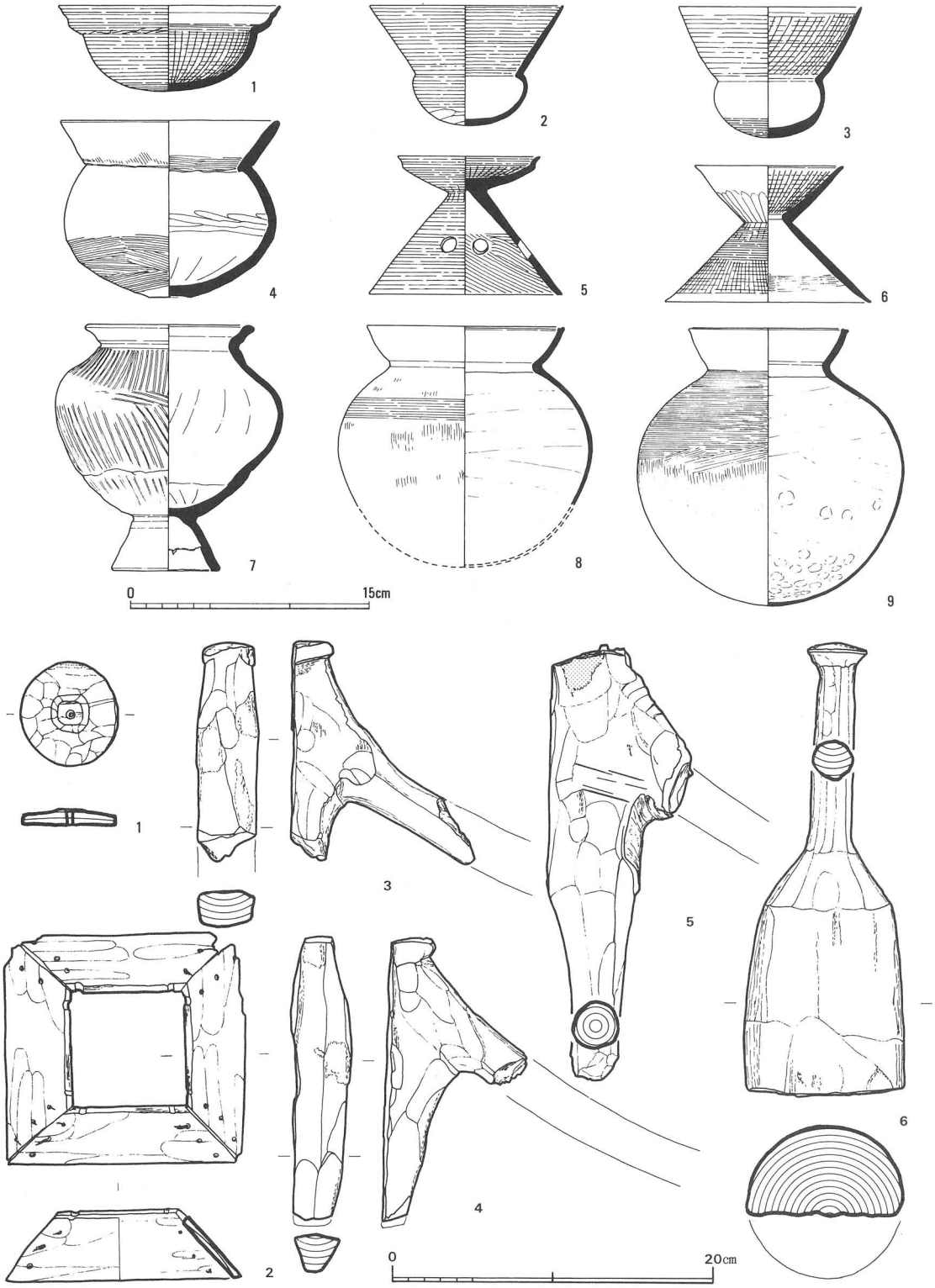
奈良時代の遺物　2条の南北溝や整地層などから遺物が出土したが、全体に量は少ない。

SD 3765からは、土器はほとんど出土しなかった。瓦は淡灰色砂（中層）、暗灰色粘土（下層）から軒丸瓦6273型式、6278型式、6282A型式、6284型式が出土している。灰褐色砂質土（上層）からは軒丸瓦6225型式が出土している。

SD 3715からは土器、瓦が出土している。土器には「菓料」「内大炊口人」と記す墨書土器2点がある。瓦では、灰色砂（中層）から軒丸瓦6225型式、6284型式、6311型式と、軒丸瓦6664型式が出土している。

SB 01北方の土器群には須恵器甕15個体、須恵器坏B蓋1個体、土師器皿A13個体以上がある。

古墳時代の遺物　3条の南北溝SD 04、SD 07、SD 08や竪穴住居跡、土壙などから、古墳時代の遺物が出土した。なかでもSD 07出土の遺物が質、量ともに豊富である。SD 07からは土師器、埴輪、木器が出土した。土師器は「布留式土器」の範疇に属するもので、第48次調査で検出したSD 6030出土土器と同じ様相をもつ。埴輪は円筒埴輪を主体とするが量は多くない。木器には、ナスビ形農具、農工具柄、砧、縦杵、直刀の鞘、槽、籠、紡錘車、腰掛、こて状木製品などがある。工具柄の内1点は完形で、全長89.4cmを計る縦斧である。直刀の鞘は3点あり、内1点は全長をとどめる。長さ56.5cm。この他用途は不明であるが、4枚の台形板を樺皮でとじ合せた、方錐台形木製品1点がある。樹種は鞘がスギ、ナスビ形農具がアカガシ、農工具柄がサカキ、砧がサカキ、腰掛がヒノキである。



第12図　古墳時代の遺物　3はSD15　他はSD07出土

第13図　古墳時代の木製品　　SD 07 出土

住居跡や土壙から出土した遺物は少ない。このなかでSD 15からは、小型丸底壺2個体や壺・甕の破片が出土し、SB 19からは、壺の口縁部片が出土している。いずれも本調査区内では古式に属する土器である。土壙では、SK 20、23から不明土製品が、SK 22から土師器の壺4個体、鍋1個体が出土している。

ま と め

今回目的とした東朝集殿については、本調査区内では検出し得なかった。当調査部では、次年度以降周辺の調査を予定しており、東朝集殿の存否はそれらの結果を待って判断したい。

奈良時代の遺構は、3時期に区分される。このうちA期、B期については、SD 3765、3715の時期が参考になる。これまでの調査成果により、SD 3765から3715への付け替えは、霊亀年間（715～716）に朝堂の建設に伴なって行われたものと考えられる。したがってA期を奈良時代初期、B期を奈良時代前半におくことができる。ただし今回の調査により、SD 3715掘削後も、SD 3765の南部は溝としての機能をとどめていた可能が大きい。C期については、B期との関係から奈良時代後半におくことができる。

B期とC期の掘立柱建物については、第136次、第140次において検出された掘立柱建物と同様な規模である。推定第一次朝堂院東外郭官衙群に連なる、何らかの官衙であろう。

古墳時代の遺構は、いずれも4世紀後半から5世紀にかけての年代を与えることができる。推定第一次朝堂院地区にのびる小支丘上には、この時期の遺構が点在しており、近くでは第140次調査で同じ時期の竪穴住居跡4棟を検出している。今回の調査では竪穴住居跡群およびそれと同時期の遺物群が、まとまって出土した点が注目される。